

2019.3.12 石原

「共通事業所の集計値」について議論する前に確認しておきたいこと

1. 「ベンチマーク」の意味について

一般的には、基準点、参照点の意味で使います。例えば基準年の物価水準や目標となる数値など、一般的には基準となるものを示すと考えられます。しかし、第4回の資料1の2ページでは、「労働者のウェイトの変化（ベンチマーク更新）」とあり、ウェイトを指していると思います。ウェイトは基準ではなく、また毎勤の調査では毎月変更していると理解しています。したがって、復元のためのウェイトをベンチマークと呼ぶのは誤解を招くのではないかと思います。

2. 本系列のギャップの原因について

元々本系列には、ウェイトの変化および一部の標本の入れ替えによるギャップが発生。このギャップが大きいことが問題とされており、この解決のために（1）ローテーションサンプリングを導入して、標本の入替えの影響を分散し、（2）共通事業所における変化の指標を作成することにしたと理解しました。ギャップの原因としては、（1）ベースとなる経済センサスの間隔があくので、経済センサスが新しくなったときのウェイトの変化が大きいことと（2）標本の入れ替えによるもの。影響は（1）のほうが大きいと理解しています。

3. 共通事業所のギャップについて

共通事業所は昨年と今年の両方に回答している事業所なので上記のギャップの原因である標本の変化の影響を受けず、また、今年のウェイトを用いるのでウェイトの変化の影響も受けない。つまり、本系列のギャップの原因を両方とも無くすので、昨年と今年に関しては、ギャップのない数値を得ることができると思います。ではギャップはどこにいったのか？ギャップは、同じ年の異なる標本を含む二つの事業所グループから得られる数値の差に含まれていると考えられます。その二つの事業所グループは、異なる標本を含み異なるウェイトを用いているからです。したがって、共通事業所から得られる指標は、長期的にはギャップのない指標とはならないと思います。共通事業所は、本系列と同じ標本、同じウェイトを用いているので、同じギャップを含んでいると考えられます。

4. 共通事業所を用いることの問題について

本系列に比べて

①標本に偏りがある

②サンプルサイズが小さい

など、復元に問題があると考えられます。すなわち、経済全体を正確に示す指標を作成するのは難しいと思います。

5. 目的は何か

上記を考慮すると、共通事業所にもギャップがあるので、もし目的が長期的にギャップのない指標を考えたいということであれば、むしろ、標本に偏りが少なくサンプルサイズもある本系列を用いて工夫したほうがより正確な指標を考えることができるのではないかと思います。

理由はわかりませんが、共通事業所を用いた指標を作成すること自体が目的なのであれば、共通事業所が継続している期間だけの「前年同期比」は、ギャップがないのですが、その数値が正確に経済全体を示しているとは言えないということを考慮して考えるべきだと思います。